

茨城県内水面水産試験場

〒311-3512

茨城県行方郡玉造甲1560

TEL0299-55-0324 FAX0299-55-1787

e-mail: ibaranai@po.net-ibaraki.ne.jp

## 「ワカサギに学ぶ会」「わかさぎサミット」が開催されました。

平成13年11月22, 23日に、霞ヶ浦町農村環境改善センターにおいて両会議がありました。「ワカサギに学ぶ会」は当内水試主催で、「わかさぎサミット」は同実行委員会(霞ヶ浦町漁協, 霞ヶ浦町, 霞ヶ浦町議会, かすみがうら町水産加工協, 霞ヶ浦町商工会ほか)主催で、当内水試も準備段階から参画しました。

### 1. ワカサギに学ぶ会

初日に行われた「ワカサギに学ぶ会」はワカサギ研究に関する情報交換の場で、第8回に当たる本年度は当内水試が当番機関を務めました。参加者は全国のワカサギ研究者、漁業関係者、行政関係者ら140名にもおよび、生態、資源、増殖手法など多方面にわたる14課題が発表されました。

#### 1) 課題発表

当内水試からは熊丸敦郎増殖部長が、「霞ヶ浦におけるワカサギ資源変動の主な要因について」と題して発表し、「霞ヶ浦におけるワカサギは、ふ化後2週間の間に86～95%の減耗があり、生残率はワムシなどの初期餌料密度と密接な関係がある。また、近年は成長の低下現象により体重が減少しており、生残率の低下による尾数の減少とあいまって資源重量が減少している。」とし、これらの原因として湖内餌料生産能力の低下を指摘しました。

東京水産大学工藤貴史助手による「ワカサギ増殖100年史」では、ワカサギの移殖放流は1906年に霞ヶ浦において始められ、その後約100年の間に日本各地そして世界へと移殖され、その結果日本の淡水魚では最も分布域が広い魚となっていることと、各地の増殖と生産の現状について報告がありました。このほかの発表は、当内水試のホームページ(アドレスは文末)に掲載しています。

#### 2) 漁業情報交換会

課題発表に続いて、今回新たに設けた漁業情報交換会が行われ、網走湖、榛名湖、山中湖、芦ノ湖、宍道湖、霞ヶ浦の漁業者及び漁協職員がテーブルにつき意見交換を行いました。漁業及び遊魚としてのワカサギ利用の実態が紹介され、資源が減少している産地の漁業関係者からは、増殖の効率化が重要課題であるとの一致した認識でした。これに対し研究サイドからは湖内の再生産環境、生育環境も重要な課題であるといった意見が出されました。このセッションは漁業と研究の接点として良い機会となりました。

このほか、会場のロビーでは、漁協による当日の漁獲物一式として、わずかなワカサギと大半を占めるハスなどの雑魚を対比した展示や、加工協による地物加工品の数々、当内水試の霞ヶ浦の魚種変遷をテーマとした水槽とパネル展示があり、霞ヶ浦の現状を参加者に訴えていました。

## 2. わかさぎサミット

### 1) 基調講演

翌日に引き続き行われた「わかさぎサミット」では、まず、富士常葉大学の前田修教授による「霞ヶ浦の今ー変わるサカナの住環境ー」と題した基調講演があり、霞ヶ浦総合開発や流域人口の増加による環境の変化を紹介し、水草帯の減少、ユスリカの減少、アオコの減少、平均水温の上昇、降雨量の減少などとワカサギをはじめとする魚介類の生息環境への影響について説明がありました。

### 2) パネルディスカッション

つづいて行われたパネルディスカッションでは、各方面の立場からの発表と討論がありました。研究の立場として、当内水試の小沼洋司場長から霞ヶ浦における環境やワカサギの生態及び資源対策について、東京水産大学の工藤貴史助手からは、ワカサギと人とののかかわりについて、湖沼環境や市場の変化をとおして考え、漁業者、水産加工業者、漁連・漁協、行政、市民、研究者が取り組むべき課題について紹介がありました。

漁業の立場からは、霞ヶ浦町漁協の樽見軍司組合長から、御自身の体験にもとづいた漁業の歴史と水産資源保護に対する決意が語られ、『ワカサギがすめない湖の水は、人間も飲むことができない水だ。』と結ばれました。西網走漁協の川尻敏文氏からは、網走湖のワカサギ、シラウオ漁業について説明があり、ワカサギの産卵期における水揚げはすべて増殖事業費に充てることや、共同操業（プール制度）など、資源管理の先進的な事例を紹介されました。

市民の立場から発言された地元の森井たか子さんは、御自身が子供のころから栄養食として、文化として「わかさぎの煮干し」を食してきたこと、霞ヶ浦の恵みに感謝するとともに子供たちにも伝えていくことの重要性について説かれました。

利用・流通面からは、かすみがうら町水産加工協の貝塚福寿理事が、ワカサギは夏は煮干し、冬は焼きわかさぎといった季節感あふれる食材として、また保存食として親しまれてきたこと。その流通の歴史として、先人の行商の方々が天びん棒、自転車、車と方法を変えながら県南県西方面へ供給してきた結果として、この地域でのわかさぎの食文化が築かれていることを紹介されました。

総合討論では、漁業者と研究機関との協力関係の在り方や、子供たちに食べさせる工夫について、資源増殖に対する方法論など活発な意見交換が行われました。

### 3) 共同宣言

これらの議論をふまえ、湖に対する多様な価値観への認識と、人と湖との共生を願い、協力と活動の継続を訴える「2001霞ヶ浦わかさぎ宣言」(下記)が、霞ヶ浦北浦海区漁業調整委員の鈴木幸雄氏により宣言されました。

その後、昼食会では昨夜の懇親会に引き続き漁協、加工協の方々による心づくしの、ワカサギ・シラウオ・エビ・ゴロ・ペヘレイ料理や鯉こくなどが振る舞われました。

最後になりましたが、会の運営に御尽力された方々、及び御参加いただいた皆様に深謝するとともに、『2001霞ヶ浦わかさぎ宣言』が広く伝わり、漁業の社会的位置付けが再認識され、そして宣言が実効あるものになっていくことを願っております。 (担当:湖沼部)

---

## 共同宣言プロローグ

### —わかさぎのつぶやき—

『人間は、私達わかさぎを太古から利用し、食を育み、そして文化を築いてきました。ゆったりとしたものの流れの中で自然の恵みを享受し、わかさぎと共生してきました。』

ところが、長いおつき合いの歴史からみれば、ごく最近の急激な変化には戸惑うばかりです。私達わかさぎにとって、とても棲みにくくなってしまいました。

飲むための水、田畑への水、工業の水、憩いの水、魚の水、生態系の水、いろいろな水があります。どれも大切な水です、決して欠くことは出来ません。

けれども、どれかを忘れてはいませんか。偏ってはいませんか。多様な価値観のない社会は、きつともろいものでしょう。湖は人間達の生活の鏡です。振り返ってみてください。人間と私達わかさぎのあり方を、湖とのあり方を。

人間社会のあらゆる産業、市民、行政、研究者のみなで知恵を絞って手を取り合って、取り組んでください。

あきらめないでください。あきらめた時は、私達と永遠のお別れです。

永らく育んできた、人と、わかさぎ、そして水との共生の関係を取り戻してください。

どうかみなさん、霞ヶ浦の水の中に棲んでいる、私達わかさぎや仲間の生き物達の声に耳を傾けてください。今日をきっかりに…』

---

## わかさぎサミット共同宣言

我々は、この霞ヶ浦の現状を見つめ、今までの価値観について深く反省し、見直す時が来ている。

それは、「水資源としての湖」という価値だけではなく、「豊かな生き物を育む湖」という価値観にも立ち返ることである。すなわち、霞ヶ浦古来のワカサギ、シラウオ、エビ、ハゼなどが棲み、その豊かな恵みを受けることもできる、湖に戻していくことである。

そして、人と、生き物と、湖が調和し、末永くつき合っていける関係を築き上げていきたい。

そのためには、水産業のみならず、あらゆる産業、住民、行政、研究者が互いに連携し、主体的に取り組んでいかなければならない。

今回の「わかさぎサミット」を契機とし、各湖沼の産地関係者がお互いの理解を深め、これらの活動を継続することにより、この機運をさらに高めていくことを、ここに宣言する。

—2001霞ヶ浦わかさぎ宣言—

平成13年11月23日



### お知らせ

1. このたび、ホームページを作成しました。ぜひ、御覧ください。

<http://www2.agri.pref.ibaraki.jp/users/naisuishi>

2. 本号より、A4版となりました。